蛭田坪遺跡

御坊駅前新川橋線街路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1994・3

財団法人 和歌山県文化財センター

例　言

1　本書は、御坊市湯川町小松原地内に所在する蛭田坪遺跡の埋蔵文化財発掘調査概報である。

2　調査は御坊駅前新川橋線街路整備工事に伴なうもので、和歌山県御坊土木事務所の委託を受けた（財）和歌山県文化財センターが、和歌山県教育委員会の指導のもとに調査を実施した。

3　現地調査の期間は1993年12月13日から1994年１月24日までで、調査の面積は約160㎡である。

4　現地調査ならびに本書の作成は（財）和歌山県文化財センター主査　武内　雅人が担当した。

5　調査・整理作業で作成した図面・写真や野帳・台帳類は（財）和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

7　当遺跡の既往の調査については、既に刊行されている「蛭田坪遺跡発掘調査概要ー 御坊駅前吉原線街路整備工事に伴なう発掘調査概要ー」　（財）和歌山県文化財センター 1993年（以下前回の調査とする。）を参照されたい。

凡　例

1　調査や本書の記述で使用した座標値は国土座標第Ⅵ系のもので、図示した北は座標北、標高は東京湾標準潮位（T．P．＋）の数値である。

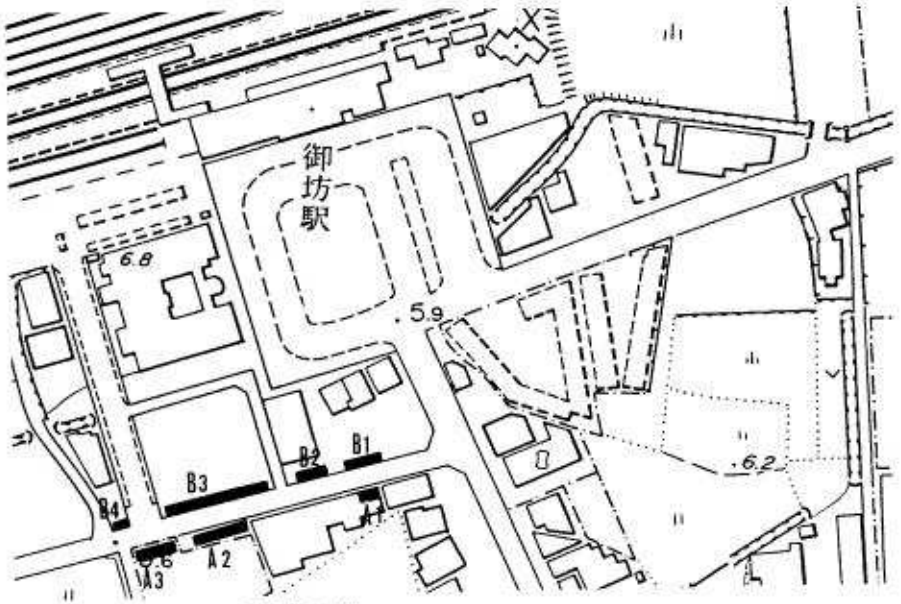
2　土層・遺物の色調は日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帳』（1993年版）に準拠した。

3　本遺跡の略号は「24・27」で、出土遺物には取り上げ袋ごとに126から始まる通し番号がついている。遺物には略号・袋番号が注記されている。なお、袋番号の１－125は既報告の出土遺物の番号である。

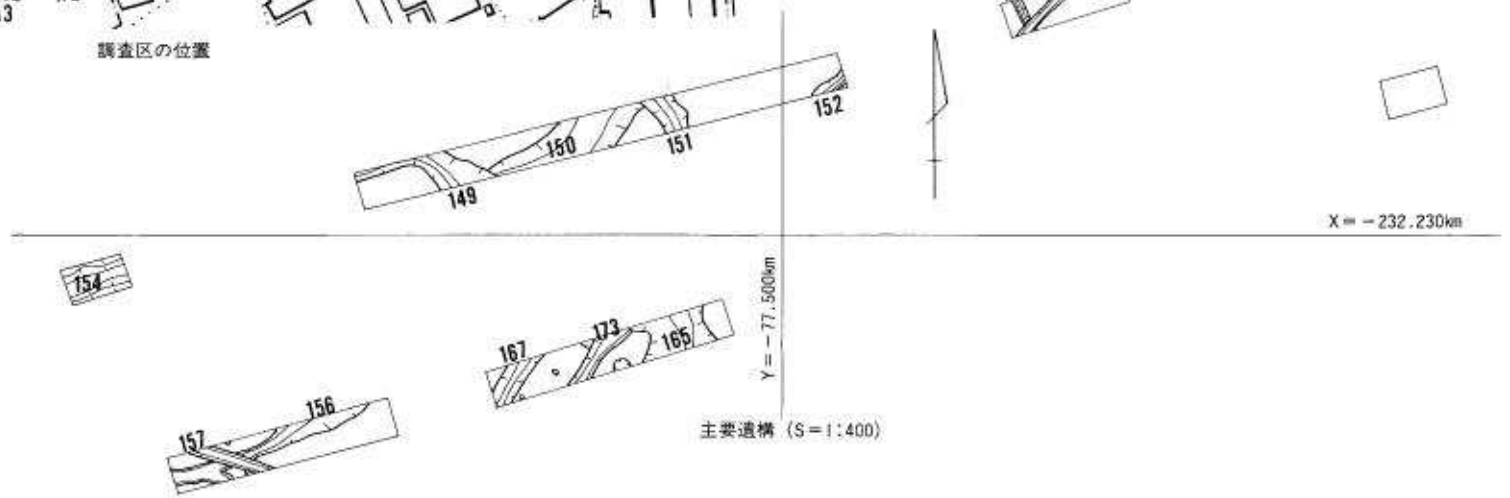
4　遺構番号はその種類に関わらず121からの通し番号となっている。１－120は既報告の前回調査の遺構の番号である。

5　本書の遺構・土層図はその縮尺が明記されていない限り１／100で、遺物は１／４の縮尺である。また、図に表示したレベル高はT．P．＋５mである。

6　本書で示した遺物の数量は接合前の破片数である。



調査区の位置



主要遺構（S＝1：400）

第一図　調査位置と主要遺構

1．概要　第1図

道路の拡幅部分に計7箇所のトレンチを設定して調査をおこなった。今回の調査地の殆どは、竪穴住居跡などが検出された前回の調査地に比べ、無遺物層上面でおよそ1mほど低い低地に相当する。

今回調査の各トレンチの無遺物層上面の高低差を比べてみると、A1区がもっとも高く標高が4.4～4.2mで、B4区がもっとも低く3.6m程である。その他のトレンチは概ね4～3.8mとなっている。このことから、A1区は住居跡がある微高地の縁辺と見ることができる。

今回の調査で検出された遺構は溝状の遺構が主で、住居跡などはない。溝状の遺構は時期が不明のものも多いが、弥生時代～中世にかけて掘削されており、微高地上で見つかった遺構の時期と一致している。遺物の出土数は前回に比べると少ない。

2．基本層序

今回の調査地の層位はほぼ共通している。以下、各層について記述する。なお、トレンチ別の各層の出土遺物は末表に示したので参照されたい。ただし、末表の土師器の項目には、認識できずに土師器とした弥生土器が含まれていることを承知置かれたい。

第5層は7.5Y4/2灰オリーブを基調とする色調で、マンガン斑を多く含む細砂混じりのシルト。出土遺物に東播系の須恵器鉢（第7図1）や瀬戸・常滑片があるため、15世紀以降の堆積層と判断できる。

第6層は7.5Y4/1灰色を基調とする色調で、マンガン斑を多く含むシルトである。

第7層は7.5Y3/2オリーブ黒を基調とする色調で、この層はシルト質の7a層と細砂を多く含む7b層に分層できる地点がある。7b層は下層の堆積層で、A2・A3区ではこの層に含まれている細砂がラミナー状に堆積している部分がみられる。したがって、7b層は洪水に起因する堆積層と判断することができる。

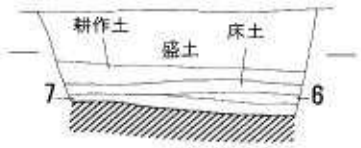
ただし、遺物の取り上げ段階から第7層を分層できたのはA2区だけで、他のトレンチでは区別できていない。A2区の第7b層には弥生土器・土師器はあるが、須恵器は含まれていない。一方、分層できずに発掘した第7層のもっとも新しい時期の遺物は、第7図2の須恵器蓋Gで、これは飛鳥Ⅱに比定できる。したがって、なお検討の余地はあるにせよ、第7a層は7世紀の堆積層で第7b層は古墳時代前期の堆積層と考えることができる。

第8層は10Y2/1黒色の粘性の強いシルトである。この層からは弥生土器片および弥生土器かもしれない土師器片が少数出土しており、弥生時代の遺物包含層である可能性がある。このことは、古墳時代前期の遺構である165溝が第8層を検出面とすることからも説

明できる。

無遺物層は地点により違っており、２.５Ｙ７/8黄色のシルトや10ＢＧ６/1青灰色シルトなどである。

３．各トレンチの状況



第２図Ａ１区

Ａ１区　第２図

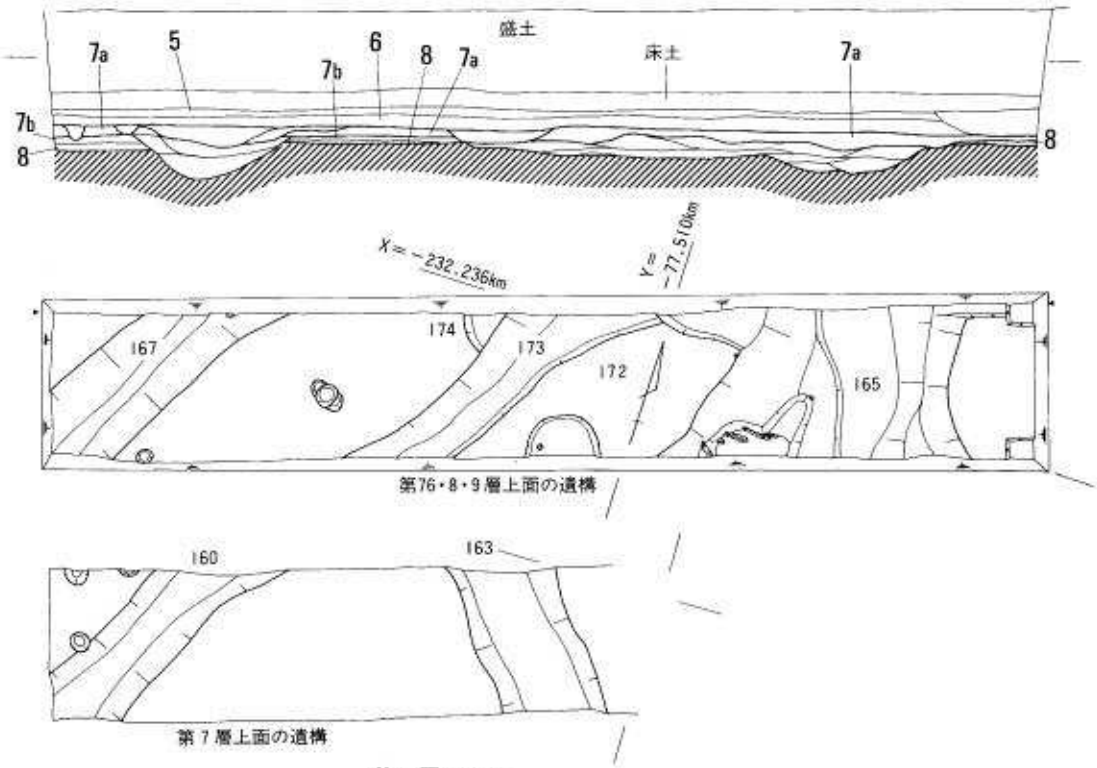
この地点から南・東に広がる微高地の縁辺に位置するらしく、第９層が西側にわずかに傾斜している。遺構はなにも検出されなかった。

Ａ２区　第３図　ＰＬ１

第７ａ層上面・第７ｂ層上面・第８層上面で各々遺構が検出された。

第７ａ層上面で検出された遺構には160・163溝とピットがある。これらの遺構は検出層位からみて、７世紀以降のものと判断される。また、160溝と重複するピットから黒色土器Ａ類片が出土していることからすると、160溝は７世紀以降９世紀以前のものである公算が強いといえる。

第７ｂ層上面では167溝とピットが見つかった。167溝の底面は南にさがっており、こ



第３図Ａ２区

の溝が南流するものであることを示している。167および160溝は掘削の層位が違うが、まったく同じ場所につくられている。

165溝は第８層上面で見つかっているが、この遺構のある部分には第７ｂ層が存在していない。したがって、この遺構の検出面は第７ｂ層か第８層かは直接判明しないが、遺構の年代観からみると、前者と理解すべきであろう。

この溝には砂とシルトが交互に堆積しており、杭が多数打ち込まれている。この溝から６世紀後半の須恵器が出土しており、掘削の時期が判明する。

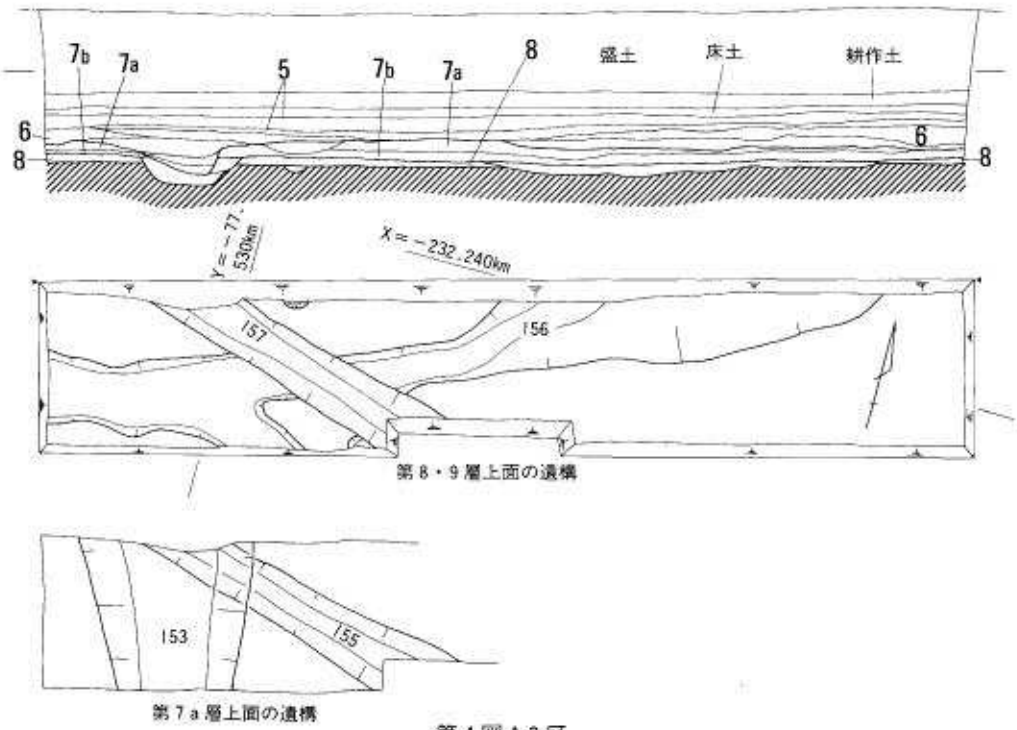
土壙状の遺構172と174は上部を163溝に壊されているが、７ａもしくは７ｂ層を検出面とする遺構である。

173溝は第８層上面で見つかった遺構で、弥生土器４と弥生土器もしくは土師器が116片出土している。この遺構は弥生時代中期もしくは古墳時代前期の公算が強い。

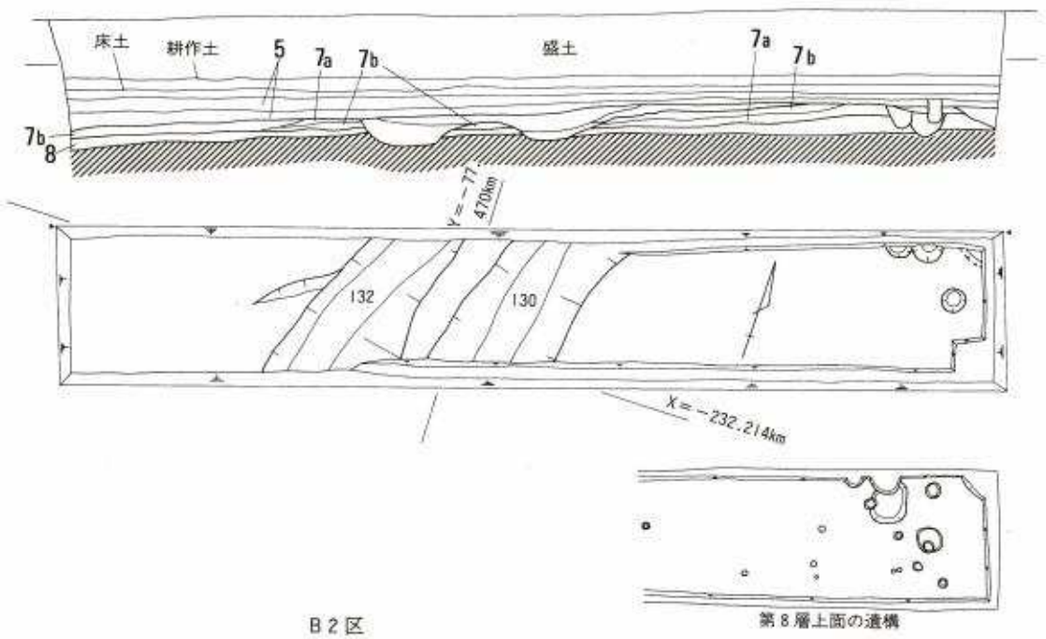
Ａ３区　第４・７図　ＰＬ１・３

第７ａ層上面と第８層上面および第９層上面で遺構が検出された。

第７ａ層上面では153・155溝が見つかった。155のほうが古い遺構で、この溝からは８世紀の土師器が出土している。

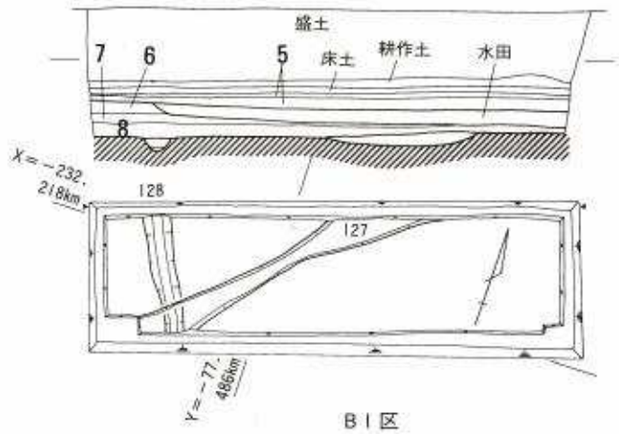


第４図Ａ３区

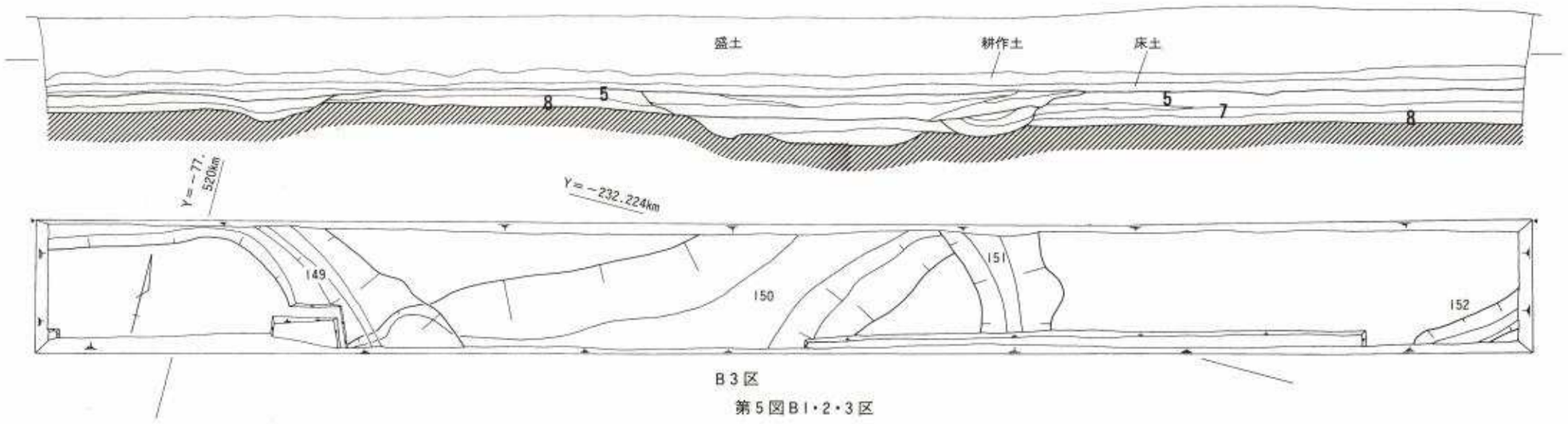


B２区

第８層上面の遺構



B１区



B３区

第５図B１・２・３区

第８層上面では156・157溝が見つかった。156溝のほうが157溝より古い遺構である。これらの遺構からは相当数の遺物が出土しているが、須恵器は伴なっておらず、156溝からは古墳時代前期に比定できる高杯(第７図３)が出土している。156溝は古墳時代前期のものとみてよかろう。したがって、157溝も古墳時代前期の遺構である公算が大きいといえる。

第９層上面では浅いピット状の遺構が二箇所で見つかった。これらの遺構は弥生時代のものである公算が大である。

155・157溝は掘削層位が違うが、まったく同じ場所につくられている。

Ｂ１区　第５図　ＰＬ２

第９層上面で127・128溝が見つかった。後者のほうが古い遺構である。

128溝の埋土は二層に区分される。この溝の埋土の上層は、周辺の無遺物層と近似した５Ｙ６/3オリーブ黄色のシルトで、埋土の下層には粗砂が堆積している。この溝からは弥生土器片１が出土している。127・128溝は出土遺物と検出層位からみて、弥生時代のものである公算が大きい。

なお、このトレンチでは、第６層上面につくられた水田跡が見つかっている。水田跡には、Ｎ６/0灰色の粗砂を多く含むシルトが堆積し、下部に鉄分が沈澱しておりトレンチの西側で緩やかに立ち上がって終わっている。この水田跡は層位からみて、14世紀以前のものと判断できる。

Ｂ２区　第５図　ＰＬ２

第７ａ層上面で130・132溝およびピットが見つかった。これらの遺構からは弥生土器や土師器片が出土しているが、層位からみてこれらの遺構は７世紀以降14世紀以前のものと判断される。

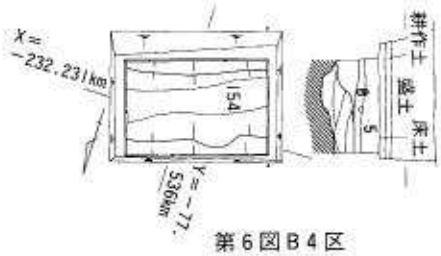
第８層上面ではピット状の遺構ならびに杭穴多数が見つかった。これらの遺構の分布はトレンチの東側に限られている。これらの遺構からはなにも出土していないが、層位からみて弥生時代のものである公算が強い。

なお、このトレンチの西側の無遺物層は、東側に比べて約20cm低くなっており、植物根状の鉄分が多く見られた。この辺が長く湿地であったことを示している。

Ｂ３区　第５図　ＰＬ３

第５層上面で149・151・150溝が見つかった。これらの遺構は重複しており、150が古い遺構である。これらの遺構は層位からみて、いずれも15世紀以降のものと判断される。150溝には砂とシルトが交互に堆積しており、常滑焼片が出土している。

152溝は第８層上面で見つかった。この溝には砂とシルトが交互に堆積している。出土遺物はなにもないが、層位からみて弥生時代の遺構である公算が大きい。

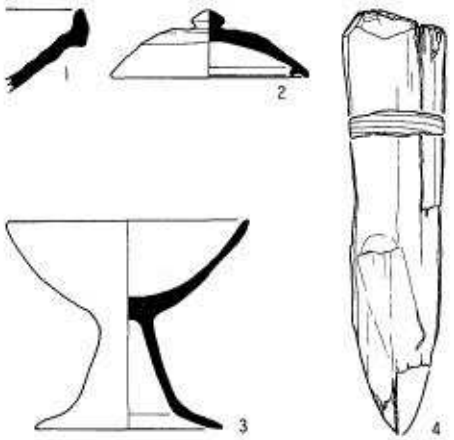


第6図B4区

B4区　第6・7図　PL2・3

溝の上端がトレンチの外にあるため、検出層位が第6層より下層であることしか判明しない。出土遺物には完形品にちかい杯Gもあるが、黒色土器A類や9世紀の土師器片がある。したがって、この溝の時期は9ないしは10世紀ということになる。また、この溝からは片方の先端を尖らせた板状の木製品（第7図4）が出土している。

なお、この溝が埋没した後、同じような位置に溝が再掘削されたことが土層断面で観察できる。



第7図出土遺物

4．まとめ

以上、調査で得られた情報とその所見の概略を記述してきた。調査区が小面積でその配置も系統的でないため、不明な点が多い。例えばどの溝と、どの溝が連続するのかはまったくわからない状態である。したがって、溝の方向性と時期や地形に関連があるのかないのかなど、現状では検討の余地はない。ただ、155と157溝や、160と167溝のように掘削の層位すなわち年代が離れているにもかかわらず、同じ場所に掘削された溝があることは、これらの溝の掘削が、地形や長期にわたる土地利用のスタイルと無縁でないことは想像できよう。

また、出土遺物の絶対数が少ないため、記述した層位・遺構の年代観にも絶対的な確証はない。その点を含み置き、この書の記述を今後の周辺地域の調査に際しての一つの仮説として、運用していただければ幸いと考える。

トレンチ・層位別出土遺物数量表

	弥生式土器	土師器	須恵器	瓦　器	陶磁器	その他	計
A 1 区							
第 6 層		8	2				10
A 2 区							
第 5 層	3	40	10				53
第 6 層	1	35	1				37
第7a層	1	134	2				137
第8b層	2	50					52
A 3 区							
第 5 層	1	31	1				32
第 6 層	2	27					29
第 7 層	1	75	5				81
第 8 層		3					3

	弥生式土器	土師器	須恵器	瓦　器	陶磁器	その他	計
B 1 区							
第 5 層	2	61	8	22		2	95
第 6 層			2				2
第 7 層		3	1				4
第 8 層	3						3
B 2 区							
第 5 層		22	3				25
第 8 層	2						2
B 3 区							
第 5 層	2	111	21	14	7		155
第 7 層		1					1
第 8 層		17					17
B 4 区							
第 5 層		12	1				13

1．A 2区全景（西から）

2．167溝（南から）

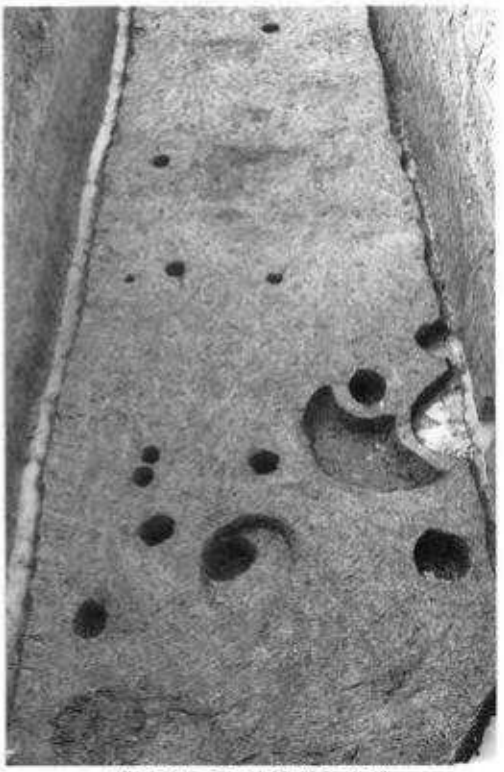
3．165溝（東から）

4．A 3区全景（東から）

5．157溝土層断面（北壁）

6．156溝土層断面（西壁）

B 1区全景（西から）



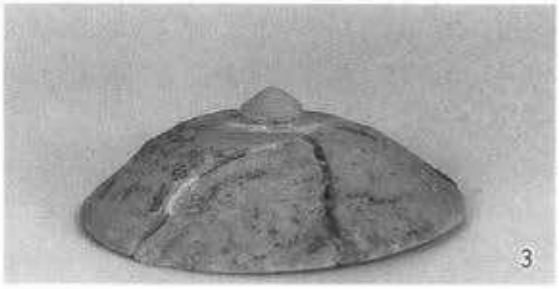
第8層上面の遺構（東から）

B 2区全景（東から）

B 4区全景（東から）

1．B３区全景（東から）

2．152溝（北から）



3．須恵器（2）　4．土師器（3）　5．木器（4）

蛭田坪遺跡

御坊駅前新川橋線街路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1994・3

編集
発行　財団法人　和歌山県文化財センター
印刷　合資会社　山　添　印　刷　店